フィリピンと日本、ピープルズパワーは健在！

5月末から6月はじめにかけて5日間の「フィリピン　市民と連帯交流の旅」（富士国際旅行社主催）に参加しました。40年前のマルコス大統領独裁時代以来、2度目の訪問です。フィリピンは「近くて遠い国」の一つではないでしょうか。飛行機で5時間ほど、来日して暮らすフィリピンの人たちも身近にいます（例えば、大相撲の「高安」の母）。筆者もフィリピン出身の生徒を何人か教えましたが、イメージとして「フィリピンは経済発展から取り残され、出稼ぎ大国で、麻薬の蔓延など治安が悪い」というものでした。

見事な経済発展ぶり

そんな筆者の「偏見」は、見事に打ち砕かれました。フィリピン最大の島ルソン島のしかも首都マニラとその近郊しか行っていませんが、高層ビルが林立し、高速道路もきちんと整備され、ショッピングセンターがそこかしこに作られ、大勢の人たちで賑わっていました。レストランやショップの入り口には40年前は拳銃を持った警備員が睨みをきかせていましたが、今回警備員は来客の案内なども行い、とてもフレンドリーでした。ドゥテルテ前大統領の強力な（非人道的？）治安対策の成果のようです。もちろん、まだまだ貧富の差は大きくスラム街もありますが、平均年齢24歳（日本は46歳）ですし、民主政治ですので、これから社会がどんどん良くなっていくのではないでしょうか。

原発はない――日本より進んでいる！

写真などを見せながら、フィリピンを紹介しました。

「フィリピンも日本と似ているところがあるけれど、LGBTQや多様性に関してはすごく進んでいるんだなと思いました」「フィリピンと日本を比べると、LGBTQへの取り組みや原子力発電など,日本が遅れている所があるなと思った」

今回の旅では全行程を「フィリピン非核市民連合」の方に案内していただきました。1991年にすべての米軍基地が撤去されましたが、そのクラーク空軍基地の跡地とスービック海軍基地の跡地を見学し（どちらも経済特別区域になっている）、今では観光地にもなっているスービックの町で、基地撤去運動をした人々と交流しました。さらにバターン半島にある「1984年に完成したが市民の反対運動により稼働できなかった原子力発電所）の入り口にも行きました（外観のみ）。そして、フィリピン大学の広大な敷地内にあるホテルに宿泊し、非核市民連合のみなさんとも交流しました。案内者も参加者も女性が多くそして元気で,フィリピンのジェンダー平等を実感しました。

米軍基地撤去――日本より進んでいる！

フィリピン大学構内にはプライド月間（LGBTQの祝賀と記念）ということもあり、レインボーフラッグが飾られ、ジョギングする大学生もそれをかざしていました。大学構内はもちろん、マニラ市内でも自転車が多く、専用レーンもつくられており、多様性と環境を大切にする社会へと進んでいることが感じられました。フィリピンでは日本軍の軍事占領と、日米の戦闘により大勢の市民が犠牲になりました。スペイン、米国、日本に支配されたフィリピンの人々は、マルコス独裁政権もありましたが、1986年にはピープルズパワー（民衆の力）によって独裁政権を倒し、さらに米軍基地も撤去し、民主政治を確立して現在に至りました。2022年には独裁者マルコスの息子が大統領に就任し、南シナ海の島々の領有権を巡って中国と対立する中で、米軍との協力関係を強化していますが、それに対抗するピープルズパワーは健在です。

「大山鳴動してねずみ一匹」の日本の政治

発端となったパーティーも禁止もせず、企業・団体献金は取り上げず、政策活動費は廃止どころか公認し、とまあこの半年間の「政治改革」問題は国会閉会と共に去りぬ、になってしまうのでしょうか。岸田首相曰く、「政治活動と国民の知る権利のバランスの中で作った制度だ」。麻生太郎自民党副総裁曰く、「民主主義にはどうしてもコストがかかる。将来に禍根を残す改革は断固避けなければならない」。どちらも金権腐敗の「昭和の政治」をずーーっと続けるとの宣言でしょうか。国民1人あたり年間250円＝総額約315億円の政党助成金は30年前の1994年に始まりました。今年の自民党の取り分は約160億円です（ちなみに日本共産党は受取っっていないので、その分も各政党に配分）。これでは足りずパーティーだ,企業・団体献金だとの貪欲さには、脱帽!?です。これだけ国民に背を向けて、持続可能だと思っているのだから、素晴らしい!?

それでも希望はある

「どんな社会にしたいか」と聞きました。「差別や偏見がなく平和な社会」「皆の個性があふれ出るような社会」「誰でも生きやすいような社会」「自由で皆にやさしい社会」等でした。まだまだ諦めるわけにはいきません。